名古屋造形大学
やさしい美術プロジェクト情報誌

ヤサビのイト

7·8月号
2009 vol.11

やさしい美術プロジェクトは病院と協働で「やすらぎのある快適な医療空間」を模索し創出する、学生主体の活動です。

▲身振りを加えながら話してくださる患者さんと聞き入るプロジェクトメンバー。

驚きと発見の訪問会

五月七日足助病院にて、今年度初の病院訪問会が行われました。プロジェクトメンバーはこの訪問会で病院周辺の地域調査を行い、院内では普段直接お話しする機会の少ない入院患者さんと交流し、制作のヒントを得ます。

例年とは違い、今回は公共交通機関を利用しました。車窓から見える風景は次第に直線的な都会の景色から、自然豊かな田園風景に移り変わっていきます。

しっとりと雨に濡れた足助の町を散策中、端午の節句という仕事を終え、のれんのように店頭や家の軒先で骨を休めるたくさんのこいのぼりが飾られた風景にこの町の特性を感じました。

地域調査を終え訪問会が始まると、訪問会初参加のメンバーは緊張した様子でしたが、患者さんの暖かい対応にメンバーも次第と積極的に会話をしていました。入院のきっかけや入院生活で感じた足助の季節のお話など、患者さん自身の視点で語られることには驚きや発見などがあり、改めて病院という場所を考えるとても貴重な機会となりました。

この訪問会を通して、患者さんのために作品制作を始める人、病院内の環境に問題提起して作品制作していく人など、この訪問会を機に活力ある作品制作・活動へと繋がっていきます。（文・芳賀 紗織）

P2・3
人と人をつなぐ　大地の芸術祭とやさしい美術プロジェクト<前編>
特集　大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009参加に向けて

P5
病院という「場所」への挑戦
特集　作品インタビュー「森ラックス」古川 陽介（日本画・2年）

人と人をつなぐ

～大地の芸術祭とやさしい美術プロジェクト＜前編＞～

大地の芸術祭とは？

大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレは、世界で有数の豪雪地帯、越後妻有地域（新潟県十日町市＋津南町）で三年に一度行われている国際芸術祭です。美術活動により地域の魅力を再発見し、世界へ発進し、地域の活性化を図ろうというアートプロジェクト「越後妻有アートネックレス整備事業」の成果の発表の場として二〇〇〇年から開催されています。

この芸術祭の背景には、現代の日本が抱える高齢化・過疎化の問題があり、里山や棚田など、古くから伝わる風習といった日本独自の文化が失われてゆく現実がありました。また、都市の時代である二十世紀、美術は美術館主体の「都市の美術」として発展する中で、本来持っていた人と人、人と土地をつなぐ力を失っていきました。

「他者の土地」で活動していく大地の芸術祭では、地域住民は「観客」としてではなく、協働者として作品に関わっていきます。その中でアーティストは美術が失いかけていた連帯・協働といった喜びを得ています。

豊かな自然に包まれた越後妻有の生活＝里山は、環境破壊をもたらした近代的価値観を変革するきっかけになると考え、そこから「人間は自然に内包される」という基本概念が生まれました。人間と自然がどう関わっていくかという可能性を示すモデル地域として、越後妻有の地域づくりが世代・地域・ジャンルを超えた協働の中で展開されているのです。

（大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ二〇〇九　公式サイトより引用）

病院と地域との協働

「日常」を守りながら

同じように「安らぎのある医療環境をつくりたい」「地域との結びつきを強めたい」と願う病院と、「場所や人々と密接に関わり合いながら作品を作りたい」と願う学生有志が集まり活動を始めたのが、やさしい美術プロジェクトです。

本プロジェクトは二〇〇六年に大地の芸術祭に初めて参加しました。当時も「病院と協働する」という取り組み姿勢は変わらず新潟県立十日町病院を舞台に活動を展開しました。

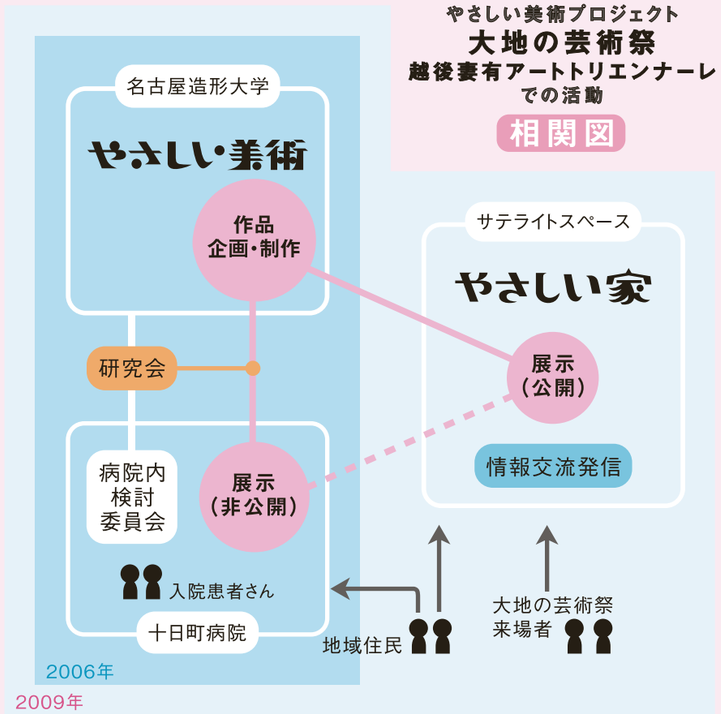
参加したプロジェクトメンバーはこれまで活動を継続してきた足助病院と同様に、十日町病院に訪問・見学するところから始め、病院という施設やそこにいる患者さん、職員さんと向き合っていきました。そして病院内の「日常」を守るため、大地の芸術祭会期中は非公開というかたちで取り組み、閉会後に十日町病院での活動記録や情報を公開しました。

より密接な関係づくり

今回の大地の芸術祭では再び、十日町病院と協働して活動を展開します。これまで互いに積み重ねてきた信頼関係の基に、より強い連携を築いていくのが目標です。

二〇〇六年の時と同様、今回も院内でのプロジェクトの活動・作品は全て非公開で展開しますが、そこで重要になってくるのが空き家活用プログラム「やさしい家」です。

このプログラムは、地元の方にお借りした十日町病院近隣の空き家を整備し活用するもので、院内での活動の様子を伝え、地域住民、大地の芸術祭来場者と病院とをつなぐ機能をもったサテライトスペースとなります。会期中、院内の作品を同時に展開したり交流イベントなどを行い、活動を広く知らせるほか、「やさしい家」を訪問した人々が活動自体に直接関わることが可能になります。それにより、病院と地域、プロジェクトメンバーと地域住民をつなぐセンターとなり、新たな関係づくりになると期待されます。



開催へ向けて

二〇〇六年に展開された作品に「みぢかな絵画」という参加型作品があります。これは病院職員さんを対象に、患者さんへ送る残暑見舞いの絵はがきを描いてもらおうという絵はがき制作プログラムでした。全二回の絵はがき制作プログラムには全ての部署の病院職員さんが参加し、約三百枚の絵はがきを集め、全病室二百七十五床のベッドサイドへ職員さんの手で届けられました。

このような作品がもつ「人と人をつなぐ」精神は、プロジェクトの活動全体の中でも重要度を増してきており、メンバー間で着実に受け継がれています。今メンバーたちは熱い思いを胸に、大地の芸術祭に向けての企画・制作・準備に奔走していますが、さて一体どのような作品が展開されるのでしょうか？企画進行中の作品を紹介したいところですが、それは次の『ヤサビのイト』九・十月号で大地の芸術祭開催中の様子や、展開された作品を紹介する時にとっておくこととしましょう。お楽しみに！もちろん、実際に「やさしい家」で活動に触れていただくのが一番です。機会があれば、ぜひお立ち寄りください。（文・竹中　仁美）

▶集められた絵はがきを、一つひとつ丁寧にフレームに収めていきます。

大地の芸術祭
越後妻有
アートトリエンナーレ2009

【会期】
2009年7月26日（日）～
9月13日（日）

【開催地】
越後妻有地域
（新潟県十日町市、津南町）

【主催】
大地の芸術祭実行委員会
http://www.echigo-tsumari.jp/2009/

いっしょにつくろう!! ちよだより

五月十九日から二十四日にかけ、名古屋市民ギャラリー矢田にてやさしい美術プロジェクトと発達センターちよだの活動記録「どんどんだんだん展」が開催されました。この展覧会は、「発達センターちよだが外部との関わりをより広く持ち、活動を公開することで一般の方に発達障がいについての理解を深めてもらう」という大きな意図を持って行われ、平成二十年度に実施した制作体験での子どもたちの写真や作品を活動の記録として展示しました。

発達障がいには、様々な症例が存在します。主な症例としては、感情を伝えることや環境の変化に合わせることが困難とされています。また、周囲の理解が必要であるにも関わらず、発達障がいについての正しい知識はまだまだ社会に浸透していないように感じます。

発達センターちよだでは、障がいを持つ子どもたちが放課後の時間を豊かに過ごせるようデイサービスを行っています。「金曜日の絵画の時間を、もっと子どもたちが楽しめる時間にしたい」というちよだの想いからやさしい美術プロジェクトは、デイサービスの取り組みと協働で制作体験を行っています。「発達」と「アート・デザイン」という異なる分野の視点や考え方に刺激されて、障がいをもつ子どもたちへの熱い想いを語り合いながら制作体験の内容を考えています。

スポンジや粘土、毛糸など、作品制作に使用する素材や手法を工夫することで子どもたちの感覚を刺激したり、制作を通して子どもたちとふれあうことで、コミュニケーション能力の発達を促しています。プロジェクトメンバーは子どもたち一人ひとりの伝えたいことや、考えていることを汲み取ろうとする中で、「発達障がいを持つということ」と向き合っています。子どもたちとのふれあいの中で、また子どもたちのお母さんや発達センターちよだの職員さんのお話から、人と人が一緒に生きていく上で大切な「信頼」や「思いやり」をより明確に感じています。

ちよだでの制作体験を通して、あるお母さんが驚いた子どもの変化は、以前に比べて集中して座っていられるようになったこと。制作体験で長時間座って作業した経験を積んだことが、成長につながったようです。

「どんどんだんだん展」の会場には来場者の笑顔が絶えることなく、子どもたちの元気と「楽しい!」という想いに空間が包まれていました。プロジェクトメンバーの他に会場の受付当番として積極的に参加して下さったちよだの職員さんやボランティアスタッフ、制作体験に参加した子どものお母さん方と一緒に展示を見ながら、子どもたちの素材や道具の使い方、表情について話しておられました。この展示を通し、発達障がいを持つ子どもたちの目の前に広がる、大きな可能性を見ていただけたのではないかと思います。

やさしい美術プロジェクトは、継続して発達障がいについて学び、人が心豊かに生きるということをさらに深く追求していきます。

（文・張 祐寿）

どんどんだんだん展 会場の声

家でも試せるような画材が多くて、写真を見ながら感触などを想像しやすかったです。楽しそうな子どもたちの様子を見て、私も試してみたくなりました。

子どもたち1人ひとりにスタッフやメンバーがついて一緒に制作することで、子どもたちが安心して自由に制作できているように感じました。

真剣に制作している姿は、まるでプロの画家のよう!のめり込むほどに集中して、楽しんでいることが伝わってきました。

森ラックス

病院という「場所」への挑戦

古川 陽介（日本画・二年）

いままで設置方法などの難しさから作品が設置されなかった、内科処置室の細長い天窓。差し込む日差しを和らげるように天窓を覆う、絵画作品「森ラックス」（作者：古川陽介）が設置されました。ベッドから見上げると、描かれた葉や花が透けて癒しの空間を演出します。

まず、作品を作ろうと思ったきっかけを教えて下さい。

やさしい美術プロジェクトに入ったからには、「とにかく何か作りたい!」と思っていました。僕は診察を受ける前の待ち時間に緊張してしまうので、一階の整形外科待ち合いに絵を飾ったら待ち時間の緊張感を和らげ、また多くの人に見てもらえるのではないかと考えました。

その後、やさしい美術プロジェクトにとって初めての試みである「処置室の天窓」へ場所を移したのはなぜですか?

制作を進めて行く中で、いくつかの作品案を研究会で提案した時、職員さんから「内科処置室の天窓がまぶしい」という意見があったんです。自分の中では既に待ち合いでの作品設置を心に決めていたので、すごく迷いました。しかし、病院内へ設置するということを改めて考え直し、設置場所として、より必要性を感じる天窓に変更することを決めました。

設置場所の変更で、作品はどのように変化していったのでしょうか?

まず、天窓に設置する時の扱いやすさと日差しを適度に取り入れる必要もあり、素材が紙から布に変わりました。学内の先生方のアドバイスのもと、退色の少ない日本画の絵の具を使用することにし、絵の具の定着が良く天然素材で目の詰まらない荒目の布にしました。

画布に隅々まで描き込んだものだと見る人が疲れてしまうのではないかと考え、内容もリラックスできる絵にし、最終的に天窓を透かしても綺麗に見える余白を活かした構図になっています。

▲天窓に作品を設置する作者（右）

制作から搬入までを経験して、感じたことを教えて下さい。

何度か現場調査をしたのですが、布の厚さや設置方法など、仮設置までの間に多くの改善点を発見でき、直接病院を訪れることの大切さを学びました。また、設置の際はベッドを移動していただくなど、何度も病院職員の方々にご協力いただき、足助病院職員さんたちの暖かさを感じることができました。

今後の展望などあれば教えて下さい。

「布に絵を描く」ということをしばらく続けてみたいと思っています。「その場所に適したものを作る」という考え方を学べたので、絵の技術を向上させながら次の作品に活かしていきたいですね。

（編集・張 祐寿）

アマノのひとこと ～コトバノツブ～

「コトバノツブ」は、足助病院薬局前に設置された天野入華おすすめの文章を病院利用者様が自由に持ち帰られる作品です。

とにかく、
雲の切れ間から見える世界はとてもきれいだ。
そして、それを見ている自分がいるから、
そこととここはつながっている。

奈良美智（アーティスト）書籍 NARA NOTE から抜粋

《アマノからのコメント》

元気がない時にふと思い出して、少し元気をもらった言葉を今回は選びました。

第七回 ぶらりみちゅく 足助旅

足助の夏の夕涼み たんころりん

「足助祭り」や「中馬のおひなさん」など、季節の行事が盛んな足助の町。そんな中、夏を風流に彩る行事「たんころりん」が行われています。

たんころりんは、竹を編んで作った籠と和紙でできた灯籠を火で灯し、足助の夜の町を照らし彩る行事。「たんころりん」という言葉は、足助地区独自の道具と土地の言葉遣いから生まれました。

そのはじまりは「町の電気を消すこと」。町並み保存のために竹籠の灯籠が地域の人々の手によって作り始められ、以来地域の人々で協力しあい、町に並べる灯籠の制作や保管を行っています。灯籠の大きさや和紙に書く内容は各家庭自由で、中には灯籠の高さが一メートルにおよぶ大きなものもあります。灯籠を覆う和紙には屋号や詩、イラストなどが描かれています。火を灯すための燃料は各家庭の台所から集められた残り油を使っているので、点灯されると揚げものの香ばしい香りが、しばしば漂ってくることもあるのだそうです。

▲人々の足下を照らす灯籠の道しるべ。

ひとつとして同じ形・大きさを持たない灯籠は、「たんころりん」という行事が地域の人々の手づくりであることの印です。また灯籠をはじめ行事の準備や、期間中行われるミニコンサートなどを通して、地域の枠を越えて人々が関係を深める機会にもなっているようです。

暗くなると、火を使って明かりを灯す灯籠は、今でこそただの照明器具のひとつとして楽しまれるものになっていますが、まだ電気などなかった時代の人々にとっては日常を照らす大切な明かりでした。また夏の夕暮れ時は外に出て、友人知人同士で集まって涼とりをしていたといいます。それをよみがえらせた「たんころりん」には、現代人が失いつつある情緒あふれる古き時代の「温かみ」がこもっているのです。

（文・竹中 仁美）

▲たんころりん開催期間中には、花火大会や演奏会も開かれます。

町中アート 発見!

住宅街のタンク

突如として住宅街に現れる、よくわからない巨大な球体2つ。JR中央線、大曽根～新守山間に乗っていると見える光景だ。

私はその光景が好きで中央線に乗る時はいつもそれが見える席に座る。球体は何かのタンクなんだろうが、それは余りに大きくて初めて見た時は感動した。住宅街に「ドンッ」とある姿はなんだかとても不思議で愛らしい。

是非とも中央線に乗る機会があったら見て欲しい。きっと気になる存在になるはずだから。

（文・水野 望）

第十回 夏の涼スポット 白倉町の岩山

推薦者・河合 恵美子さん（訪問看護師長）

訪問看護師長というお仕事上、病院の外へ出る機会が多い中、「人が自然の中へ帰ることの大切さ」に気がついたと話す河合さんは、足助地区の白倉町にお住まいです。そこには今も昔も変わらず人々に親しまれる岩山とお社があります。

車一台がなんとか通ることのできる山道を行くと、舗装されていないけものみちが右手に現れます。木立の続く山の中をけものみちに沿って歩いて行くと、巨大な岩が寄りかかってできた洞が現れます。「神明社」という天然の岩でできたそのお社には、地元の人々が春秋のお祭りや年末年始にお重を持ち寄って集まったり、普段も散歩でお詣りに行ったりします。

整然と生える木々が強い日差しを遮り、しんと静まり返るけものみちは、夏から秋にかけて特に心地よい場所なのだそうです。手つかずの、自然のかたちが守られた白倉町の岩山。「歩いていると、神秘的な何かに抱かれているような気がします」と河合さんは語ってくれました。

（文・竹中 仁美）

▲お社より更に山の上には、登山道が続いています。

院内散歩

青空ばたけ

足助病院の裏手からにぎやかな声が聞こえてきます。今回の院内散歩は、足助病院B棟の裏手に四年前から園芸療法の一環として始まった「青空ばたけ」です。初めはプランターでこじんまりと作っていたものが発展し、今ではトマトやスイカもできる立派な畑になりました。

育てる野菜を選ぶ決め手は「患者さんが興味をもてる野菜」であることも重要。患者さんご自身が育てた経験のある野菜だと、職員さんは患者さんから育て方のアドバイスを受けることができます。患者さんにとって「教える」ということは病院内で受身になりがちな患者さんの、自信につながると職員さんは言います。

取材中にも二階から様子を見ていた患者さんがたまらず一言。「ナスは支柱を立てなかんよ！」すると次々と窓から患者さんが顔をのぞかせてアドバイスを飛ばし合い、院内とは思えないほどにぎやかに！そこには職員さんと患者さんという壁を通り越えて、人間同士のふれあいがありました。野菜たちは、もうすぐ収穫の時期を迎えます。患者さんも参加して育てた野菜は特別な味がすることでしょう。

（文・浅野 瑠璃子）

▲職員さんは鍬を持ち、畑には藁も敷いて本格的に活動しています。

院長の一句

女性が働きやすい社会、友愛、博愛、いずれも人権尊重だ。

編集後記

大地の芸術祭が近づきプロジェクト内が慌ただしくなる中、どんな作品ができるのか、どう新聞に載せようか、期待と緊張で胸いっぱいです。皆様もぜひお楽しみに。（竹中）

ミーティングではメンバーと、病院では職員さんと意見交換をします。プロジェクトではコミュニケーションをとることを大切にしており、またその能力を高めてもらえると感じています。（張）

足助にて病院以外の取材に久しぶりに行ってきました。山中では自然の驚異に出くわし、地元の方に助けていただきました。その手際の良さに自然と共生してきた方々の暮らしを垣間見ました。（浅野）

妻有研修紀行

6月7日 名前 川島健朗

十日町へ向かう車から見える夕京色は晴れてても、くもってても、いつもきれいだと思う。

ひの地域でも山や木や川は美しいと感じる。そしていつも気づかされる。

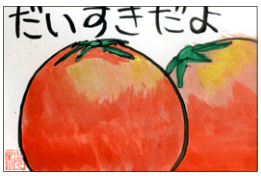
妻有に向かうにつれて、山々の色が濃くなっていくことに。

お知らせ

絵はがき募集！

やさしい美術プロジェクトでは、足助病院の患者さんが使用する絵はがきフレーム付きマルチボックス「私の美術館」に届ける絵はがきを募集しています！

【募集要項】
はがきサイズ
縦100ミリ×横148ミリ
※横書きのみの募集となります。
※作品は返却されません。
※患者さんへの配慮により、選定する場合もあります。
※作品を刊行物などの資料に掲載する場合もあります。



大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2009開催

会　期　2009年7月26日(日)～9月13日(日)
開催地　越後妻有地域(新潟県十日町市、津南町)
主　催　大地の芸術祭実行委員会
http://www.echigo-tsumari.jp/2009/

【やさしい美術作品展示場所】
新潟県立十日町病院(非公開)
やさしい家(公開)

【やさしい美術作品お問い合わせ】
名古屋造形大学やさしい美術プロジェクト
※やさしい美術プロジェクトの作品のみのお問い合わせになります。ご了承ください。

足助たんころりんの夕涼み

会期　2009年8月1日(土)～8月15日(土)
時間　日没後～21時頃
会場　愛知県豊田市足助町旧塩の道街道沿い
主催　足助観光協会

■連絡先
名古屋造形大学
やさしい美術プロジェクト「ヤサビのイト」係
〒485-8563　愛知県小牧市大草年上坂6004
TEL　0568-79-1111（代）　FAX　0568-79-1070
URL　http://gp.nzu.ac.jp　MAIL　gpnews@nzu.ac.jp

［協力］足助病院/足助町の皆さん/発達センターちよだ
足助観光協会/大地の芸術祭実行委員会

■発行
名古屋造形大学
平成19年度 文部科学省 現代GP選定事業
やさしい美術プロジェクト
［ヤサビのイト編集部］
浅野 瑠璃子（視覚伝達D・3年）　竹中 仁美（情報D・3年）
張 祐寿（メディア造形・3年）　堀 真知子（視覚伝達D・4年）
第11号（奇数月第3日曜日発行）

リーダー川島による
ヤサビのウラ

足助の町を取材しているところ。
地域を知るところから作品づくりは始まるんです。